

駒込殺人事件

下卷

東大寺
茂

列車は富士川を通過した。日中なら、右手に白雪をかぶった富士山が見えるはずなのだが、日の出前の空は薄暗い闇に包まれている。

下谷の佐藤のマンシヨンの張り込み中に主任から呼び出され、明朝一番の列車で大阪府警を訪ねるよう指示されたのは昨夕である。

目的は、大阪府警在任中の佐藤について、その人となり、仕事ぶりを把握することである。とりわけ、飛鳥警部から強い指示を受けたのは、四課在任中の佐藤が、暴力団との癒着があるといわれていた鬼沢道太と接点があったかどうかを掴むことであった。

飛鳥警部から、佐藤が四課に属していたという話を聞いたとき、何故か酒巻警部補の胸は一瞬小さく震えた。それは、長年の刑事生活で蓄積されてきた感覚が無意識に反応した、といえるものであった。

夜、明かりがつくことから部屋にいたことは間違いないのだが、依然、佐藤の顔写真は押さえられていなかった。警察庁から送られてきた書類にあった、採用時の若い顔写真を目にしただけである。

飛鳥警部が手配したスイカカードのほうも空振りだった。佐藤、大迫とも、スイカカードの履歴からは、事件につながるような使用履歴は発見できなかったのである。

もし、ふたりが宅配業者に荷物を持ち込んだ人物だとしたら、ふたりは足がつくのを恐れ、切符を買って列車を利用したか、車を利用したことになる。

事件発生から二十日余り。龍、ゆり、真由美——そして、佐藤、大迫——現在のところ、捜査対象はこの五人に絞られつつあるが、彼らがどういう関係にあるのか？ 等々力駅近くの宅配業者と天王寺公園近くの宅配業者に毒物入りワインを持ち込んだ男はつながりがあるのかないのか？——

入り組んだ糸はまだまだ解けていない。

猛スピードで流れていく車窓の景色に漠然と視線を投げかける酒巻警部補の頭の中を、さまざまなきが去来した。

約束の九時ちょっと前。大阪府警に入った酒巻警部補は、飛鳥警部がアポイントを取ってくれた刑事部刑事総務課を訪れた。

「お忙しいところ時間を取っていただいてすみません」

名刺を交換した酒巻警部補は、総務係長の肩書きをもった相手に頭を下げた。

「すでに退職した佐藤健一についてお聞きになりたいのですが、その理由を先ず聞かせてください」

いかにも人事畑に根を下ろし続けてきた感のする係長は、挨拶もそこそこに本題に入ってきた。酒巻警部補は、事件の経過と佐藤との関連について手短かに説明した。

「なるほど——ということとは、佐藤健一について疑いを持っているということですか」

「いえ、それはこれからの捜査次第です。我々も身内の人間が関わっているとは思いたくないんですかね」

一段と硬い表情になった相手の顔を見て、酒巻警部補はいった。

「……分かりました。で、どういうことを知りたいんですか？」

「現役時代の仕事ぶり、性格はどうだったんでしょうか？」

「仕事は真面目でしたよ。二課時代も四課時代もね。性格は地味だが、粘り強く、何事にも徹底していたと、どの上司も評価してますね」

手元の書類に目を落としながら、係長は応えた。

「そうですね……。特に、問題を起こすようなことはなかったんですね」

「ありませんね。本部長賞も受賞してますしね」

「そうですね——。四課時代の仕事で、特に深く関わっていたのはどんな事件でしたか」

「四課時代ですか——。そうですね。広域暴力団犯罪撲滅キャンペーンに取り組んだことでしょうか」

「それはいつごろのことですか？」

「平成十三年から十四年の二年間です。この時期は、府警だけでなく、近畿一円の警察の総力を挙げて広域暴力団犯罪撲滅に取り組みましたからね」

「平成十三年から十四年というと、今から十一、二年ほど前ですね。佐藤が退職したのはその翌年

ですね。佐藤は早期退職してますが、理由はなんだったんですか？

「理由ですか。家庭上の都合ですね」

「家庭上の都合？……」

佐藤の家族事情を知る酒巻警部補には、ピンとこなかった。

「亡くなった鬼沢代議士とは、接点はありましたか？」

「鬼沢代議士とですか。それは私には分かりません」

「鬼沢代議士は暴力団と癒着があったんではないかと噂されていますね。とすると、先ほどのキャンペーン取り組み中に何らかの接点があったとは考えられませんか」

「それは私には分かりません」

「当時の事情をよく知っておられる方はどなたですか？」

「当時のことですか——。なんせ、十年以上も前のことですからね。主だった人はみな退職してますよ」

「そうですか……」

酒巻警部補の顔に落胆の色が色濃くにじみ出た。

「もしかしたら、一人だけいるかもしれません。すでに退職してますが、当時、佐藤健一と一緒にキャンペーンに携わっていた警部補です。彼なら、ひよっとすると知ってるかもしれません」

「ほんとうですか！」

目を大きく見開いた酒巻警部補は、体を前にのめりだした。

「酒巻さん。キャンペーンが展開されたときは、わたしは四十六でした。当時は警察だけでなく、在野の弁護士の有志からも暴力団撲滅の声が大きく上がりましてね。彼らは、暴力団そのものの存続を認めない法律制定運動を市民も巻き込んで展開したんですよ。それで世論も盛り上がりましてね。その声に勇気付けられた警察庁は、重い腰を上げようとしないう政府を見限って、議員立法を働きかけたんですよ。ところが、国会に上程される前に、その法案は潰されてしまいました。」

そのことを知ったときは、地団太を踏んで悔しがりましたよ。この法案が通れば、恐怖で声を上げることもできずに暴力団の犠牲になっている多くの市民を救うことができたわけですからね。

おそらく、キャンペーンの先頭に立っていた佐藤健一も同じような思いをもっていたんじゃないでしょうか」

今まで感情を表さなかった係長の顔は紅潮し、冷徹そのものだった目にも熱い輝きが溢れている。酒巻警部補はその顔に熱い視線を注いだ。

係長に紹介された元警部補の自宅は、阪急宝塚線清荒神（きよしこうじん）駅から徒歩で十分ほどのところである。駅を出て、もらった地図を片手に道幅の狭い商店街を歩いていく。この道は、清荒神清澄寺（せいちしょうじ）に続く参道となっている。左右に軒を連ねる店の中には佃煮屋が多い。

ほどなく朱塗りの大鳥居が見えてきた。地図では、元警部補の家はその手前の道、有馬街道を左に曲がってすぐとなっている。

二分ほどで、「真田（さなだ）」という表札がかかった一軒家の前まで来た。酒巻警部補は玄関のチャイムを押した。その向こうから、ドスの利いた声が返ってきた。

「十年以上前の広域暴力団犯罪撲滅キャンペーンについて詳しくお知りになりたいそうですな」

案内された八畳ほどの部屋に通された酒巻警部補は、値踏みするような鋭い視線で見据えられた。「ええ、総務課の一色（いっしき）係長から、真田さんがそのころの事情に一番詳しいだろうと教えられたものですから」

酒巻警部補は、四課の刑事を絵に描いたようないかつい顔つきをしている、大柄な男の顔を見て応えた。

「それで、それを知ってどうするつもりですか」

ドスの利いた声と射るような視線が酒巻警部補に突き刺さってきた。

「真田さんは、昨年末に国会議員の鬼沢道太氏が殺害されたのをご存知ですか」

「ええ、知ってますよ」

「ご承知のように、鬼沢氏は大阪選出の国会議員です。その鬼沢氏が暴力団と癒着があったんではないかという噂を耳にしましてね。それで、十数年前に取り組まれた広域暴力団犯罪撲滅キャンペーンについて詳しく知りたいんですよ」

「?……:ということは、鬼沢の死はキャンペーンとつながりがあるともいうんですか」

「それは今のところ分かりません。ただ、お分かりいただけだと思いますが、事件解決のためには

あらゆる可能性を検討する必要があるわけですから」

酒巻警部補は、真田を紹介するに当たって一色係長から念を押された、佐藤の名前は一切持ち出さないように、との言葉をかみ締めながら応えた。

「……………」

真田は腕を組んで黙り込んでしまった。

右足が間断なく、神経質そうに床を叩いている。

酒巻警部補はその様子に視線を投げかけながら、相手が口を開くのを辛抱強く待った。

「酒巻さん。あなたは当時のことはまったく知らないんですか」

「ええ、わたしはずっと駒込署の刑事課一筋でしたから」

「そうですか……。一時鳴りを潜めていた暴力団が殺傷事件を頻繁に起こしたのは十五年ほど前です。関東ではそれほどでもなかったですが、大阪や北九州では一般市民の被害者までも出ましてね。それで、警察庁がリーダーシップを執り、大阪と北九州を重点地区に指定し、暴力団対策を強化することになったんですよ。キャンペーンを展開したのは今から十二年ほど前です。大阪府警が中核となって近畿一円の全警察が広域暴力団犯罪の撲滅に取り組みました。ちょうどそのときです。犠牲になった一般市民の弁護団が、根本的に暴力団犯罪をなくすためには、暴力団そのものの存在を認めない法律を制定する必要があるという運動を起こしましたね。

その運動は瞬く間に市民の間にも広がりました。我々も意を強くしたものです。

キャンペーンは二年間続きました。法律制定を推進する弁護団も増えていきました。

その甲斐あって、キャンペーン終了間際に、警察庁から提言した、暴力団撲滅対策法が議員立法として取り上げられるまでになったんですよ。

ところが、それは日の目を見ませんでした。キャンペーンの先頭に立っていた我々にとってはショックでしたよ」

当時の無念さがこみ上げてきたのか、真田のいかつい顔が歪んだ。

「法案が日の目を見なかった理由はなんだったんですか」

「議員立法の動きが表面化すると、暴力団による露骨な妨害工作が展開されてね。法案成立を叫ぶ市民デモに対する嫌がらせは日常茶飯事で、相手は暴力団とは特定されませんが、法制化推進の中心的人物だった弁護士と地元の国会議員が交通事故で重傷するという事件も起きました。そういうものが、議員立法を推進していたほかの国会議員にも影響を与え、日の目を見なかったというのが当時の認識です」

「そうですか……」

「しかし、それは表向きで、真相は、それにかこつけて、陰で法案潰しに奔走した政治家の影響力によるものだというのが、警察内部では囁かれてましたよ」

「ほうー！ その政治家の名前は分かっているんですか」

「もう亡くなったからいいでしょう。鬼沢、鬼沢道太ですよ。奴は、我々第一線の刑事から見れば、憎んでも憎みきれない男ですよ。あんな奴が、何故国会議員を続けられたのか、日本国民の資質を疑いますよ」

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。